

# 分析表

\* 「青空文庫」の表記を元に行っているため、教科書の記述とは若干違いがあります。

説明部		わく	構造
<p>ある秋のことでした。二、三日雨がふりつづいたその間、ごんは、外へも出られなくて穴の中にしゃがんでいました。</p> <p>雨があがると、ごんは、ほっとして穴からはい出しました。空はからっと晴れていて、もずの音がきんきん、ひびいていました。</p> <p>ごんは、村の小川（おがわ）のつつみまで出て来ました。あたりの、すすきの穂には、まだ雨のしずくが光っていました。川は、いつも水が少いのですが、三日もの雨で、水が、どっとまわっていました。ただのときは水につかることのない、川べりのすすきや、萩の株が、黄いろくにこった水に横たおしになって、もまれていきます。ごんは川下の方へと、ぬかるみみちを歩いていきました。</p>		<p>これは、私が小さいときに、村の茂平というおじいさんからきいたお話です。</p>	<p>人 物</p> <p>ごん</p> <p>兵十・その他</p>
<p>はじまり</p> <p>兵十がいなくなると、ごんは、びよいと草の中からとび出して、びくのそばへかけつけました。ちよいと、いたずらがしたくなったのです。ごんはびくの中の魚をつかみ出しては、はりきり網のかかっているところより下手（しもて）の川の中を目がけて、ぼんぼんなげこみました。どの魚も、「とぼん」と音を立てながら、にこった水の中へもぐりこみました。</p> <p>一ばんしみに、太いうなぎをつかみにかかりましたが、何しろぬるぬるとすべりぬけるので、手ではつかめません。ごんはじれつたくなって、頭をびくの中につっこんで、うなぎの頭を口にくわえました。うなぎは、キュツと言ってごんの首へまきつきました。</p> <p>ごんは、びつくりしてとびあがりしました。うなぎをふりすててにげようとしたが、うなぎは、ごんの首にまきついたままはなれません。ごんはそのまま横つとびにとび出して一しようけんめに、にげていきました。</p> <p>ほら穴の近くの、はんの木の下でふりかえって見ましたが、兵十は追っかけては来ませんでした。</p> <p>ごんは、ほっとして、うなぎの頭をかみくだき、やつとはずして穴のそとの、草の葉の上のせておきました。</p>	<p>ふと見ると、川の中に人がいて、何かやっています。ごんは、見つからないように、そうと草の深いところへ歩きよって、そこからじつとのぞいてみました。</p> <p>「兵十だな」と、ごんは思いました。</p> <p>その中には、芝の根や、草の葉や、くさった木ぎれなどが、ごちやごちやはいっていました。でもところどころ、白いものがきらきら光っています。それは、ふとうなぎの腹や、大きなきすの腹でした。</p> <p>兵十はぼろぼろの黒いきものをまくし上げて、腰のところまで水にひたりながら、魚をとる、はりきりという、網をゆすぶっていました。はちまきをした顔の横つちように、まるい萩の葉が「まい、大きな黒子（ほくろ）みたいにへばりついていました。</p> <p>しばらくすると、兵十は、はりきり網の一ばんうしろの、袋のようになつたところを、水の中からもあげました。</p>	<p>山の中にあなをほって、一人びつちでくらしているごんは、村へ出ていたずらばかりし、村人からいたずらぎつねとされていた。</p>	<p>人物と状況・人物と人物の場を記すものこと</p>
<p>兵十は、びくの中へ、そのうなぎやきすを、ごみと一しよにぶちこみました。そして、また、袋の口をしばって、水の中へ入れました。</p> <p>兵十はそれから、びくをもつて川から上（あが）りびくを土手（どて）において、何をさがしにか、川上（かわかみ）の方へかけていきました。</p> <p>そのとたんに兵十が、向うから、「うわアぬすと狐め」と、どなりたてました。</p>	<p>働き者だが、貧しい兵十は、なぜか、魚取りに夢中だ。それを深い草の中から食い入るように見ているごん。</p>	<p>雨が降り続いた間、穴でしゃがんでいたごんには、外の景色はたまらなくうれしい。雨上がりの川辺を心を躍らせながら行くごん。</p>	<p>兵十がいなくなると、たちまちいたずら心をおこし、魚を川に放り込むごん。それを見て、ぬすどぎつねめと追い立てる兵十と、首にまきついたうなぎをそつと穴の近くの草の上に置いておくごん。</p>
<p>長雨が上がってうれしいごんは、川辺でいたずらの種を見つけたが、兵十に追い立てられる。「ぬすとぎつねめ」とにくしみをもつ兵十と、いたずらの相手に見せるごんの好奇心の強さ、やさしさ。</p>			

	つづき (1)	おこり
<p>月のいい晩でした。ごんは、ぶらぶらあそびに出かけました。中山さまのお城の下を通過してすこしいくと、細い道の向うから、だれか来るようです。話声が聞えます。チンチロリン、チンチロリンと松虫が鳴いています。</p> <p>ごんは、道の片がわにかくれて、じっとしていました。</p>	<p>つぎの日には、ごんは山で栗(をど)つきりひろって、それをかかえて、兵十の家へいきました。裏口からのぞいて見ますと、</p> <p>どうしたんだろうと、ごんが思っていますと、</p> <p>ごんは、これはしまったと思いました。かわいそうに兵十は、いわし屋にぶんなぐられて、あんな傷までつけられたのか。ごんはこうおもいながら、そと物置の方へまわってその入口に、栗をおいてかえりました。</p> <p>つぎの日も、そのつぎの日もごんは、栗をひろっては、兵十の家へもって来てやりました。そのつぎの日には、栗ばかりでなく、まつたけも二、三ぼんもっていきました。</p>	<p>十日ほどたつて、ごんが、弥助というお百姓の家の裏を通りかかりますと、鍛冶屋の新兵衛の家のうらを通ると、ごんは、</p> <p>「ふふん、村に何かあるんだな」と、思いました。</p> <p>「ふふん、村に何かあるんだな」と、思いました。</p> <p>「何だろう、秋祭かな。祭なら、太鼓や笛の音がしそうなものだ。それに第一、お宮にのぼりが立つはずだが」</p> <p>ごんなことを考えながらやってみると、いつの間にか、表に赤い井戸のある、兵十の家の前へ来ました。</p> <p>その小さな、こわれかけた家の中には、大勢の人があつまっていました。よそいきの着物を着て、腰にぬいぐるみをさげたりした女たちが、表のかまどで火をたいています。大きな釜の中では、何かぐずぐず煮えていました。</p> <p>おひるがすぎると、ごんは、村の墓地へ行って、六地藏さんのかげにかくれていました。いいお天気で、遠く向うには、お城の屋根瓦)が光っています。墓地には、ひがん花が、赤い布のようにさきつづいていました。と、村の方から、カーン、カーン、と、鐘が鳴って来ました。葬式の出る合図です。</p> <p>やがて、白い着物を着た葬列のものたちがやって来るのがちらちら見えはじめました。話声も近くなりました。葬列は墓地へはいつて来ました。人々が通ったあとには、ひがん花が、ふみおられていました。</p> <p>ごんはのびあがって見ました。</p> <p>「ははん、死んだのは兵十のおつ母(かあ)だ」</p> <p>ごんはそう思いながら、頭をひっこめました。</p> <p>その晩、ごんは、穴の中で考えました。</p> <p>「兵十のおつ母は、床についていて、うなぎが食べたいと言ったにちがいない。それで兵十がはりきり網をもち出したんだ。ところが、わしがいたずらをして、うなぎをとって来てしまった。だから兵十は、おつ母にうなぎを食べさせることができなかつた。そのままおつ母は、死んじゃったにちがいない。ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいとおもいながら、死んだんだろう。ちょッ、あんないたずらをしなけりやよかつた。」</p>
<p>話声はだんだん近くなりました。それは、兵十と加助というお百姓でした。</p>	<p>兵十が、赤い井戸のところで、妻をといでいました。兵十は今まで、おつ母と二人きりで、貧しいくらしをしてきたもので、おつ母が死んでしまつては、もう一人ぼっちでした。</p> <p>「いわしのやすうりだアイ。いきのいいいわしだアイ」</p> <p>「いわしのやすうりだアイ。いきのいいいわしだアイ」</p> <p>と、弥助のおかみさんが、裏戸口から、</p> <p>「いわしをおくれ。」と言いました。いわし売りは、いわしのかごをつんだ車を、道ばたにおいて、びかびか光るいわしを両手でつかんで、弥助の家の中へもってはいりました。</p> <p>兵十は、午飯をたべかけて、茶碗をもつたまま、ぼんやりと考えこんでいました。へんなことには兵十のほったに、かすり傷がついています。</p> <p>います。どうしたんだろうと、ごんが思っていますと、兵十がひとりごとをいいます。</p> <p>「たいだれが、いわしなんかおれの家へほうりこんでいったんだろう。おかげでおれは、盗人と思われて、いわし屋のやつに、ひどい目にあわされた」と、ぶつぶつ言っています。</p>	<p>その、いわし屋の木のかげで、弥助の家内が、おほろをつけていました。</p> <p>新兵衛の家内が髪をすいていました。</p> <p>兵十が、白いかみしもをつけて、位牌をささげています。いつもは、赤いさつま芋みたいな元気のいい顔が、きようは何だかしおれていました。</p>
	<p>井戸の前で妻をといでいる兵十の姿を見て、「おれと同じひとりぼっちの兵十か」と共感するごんは、とつきにいわしをぬすんで兵十の家に投げつぐないにます、込み、一ついいことをしたと納得した。</p>	<p>村を歩き回っていたごんは、兵十のうちで葬式があり、死んだのが兵十のおつかあだと知る。何でも知りたがり屋のごんだが、美しい景色は強く心をひかれる。</p> <p>葬式の夜、自分のいたずらと兵十のおつかあへの詩とを結びつけ、強く後悔するごん。</p> <p>ある日、ごんは兵十のうちの葬式を見、兵十のおつかあが死んだことを、自分のいたずらと結びつけて後悔する。</p>

<p>おおづめ</p>	<p>やま</p> <p>ごんは、ふたりとたおれました。</p> <p>ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。</p>	<p>ごんは、へえ、こいつはつまらないなと思いました。おれが、栗や松たけを持って行ってやるのに、そのおれにはお札をいわないで、神さまにお札をいうんじゃないやア、おれは、引き合わないなあ。</p> <p>そのあくる日もごんは、栗をもって、兵十の家へ出かけました。</p> <p>それでごんは家の裏口から、こっそり中へはいりました。</p> <p>ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。</p>	<p>「ああん？」</p> <p>「何が？」</p> <p>「ふうん、だれが？」</p> <p>「ほんとかい？」</p> <p>「へえ、へんなこともあるもんだなア」</p> <p>それなり、二人はだまって歩いていきました。加助がひよいと、後ろを見ました。</p> <p>加助は、ごんには気がつかないで、そのままさっさとあるきました。吉兵衛というお百姓の家まで来ると、二人はそこへはいつていきました。ボンボンボンと木魚の音がしています。窓の障子にあかりがさして、大きな坊主頭がうつつて動いていました。</p> <p>しばらくすると、また三人ほど、人がつれだつて吉兵衛の家へはいつていきました。お経を読む声がきこえて来ました。</p>
<p>兵十は火縄銃をぼたりと、とり落しました。青い煙が、まだ筒口から細く出ていました。</p>	<p>兵十は物置で縄をなっていました。</p> <p>そのとき兵十は、ふと顔をあげました。と狐が家の中へはいったではありませんか。こないだうなぎをぬすみやがったあのごん狐めが、またいたずらをしに来たな。</p> <p>「ようし。」</p> <p>兵十は立ちあがって、納屋にかけてある火縄銃をとって、火薬をつめました。</p> <p>そして足音をしのばせてちかよって、今戸口を出ようとするごんを、ドンと、うちました。</p> <p>兵十はかけよって来ました。家の中を見ると、土間に栗が、かためておいてあるのが目につきました。</p> <p>「おや」と兵十は、びっくりしてごんに目を落しました。</p> <p>「ごん、お前だったのか。いつも栗をくれたのは」</p>	<p>お城の前まで来たとき、加助が言い出しました。</p> <p>「さっきの話は、きつと、そりやあ、神さまのしわざだぞ」</p> <p>「おれは、あれからずっと考えていたが、どうも、そりや、人間じゃない、神さまだ、神さまが、お前がたつた一人になったのをあわれに思わつしやつて、いろんなものをめぐんで下さるんだよ」</p> <p>「そうだとお。だから、まいにち神さまにお札を言う方がいいよ」</p> <p>「えっ？」と、兵十はびっくりして、加助の顔を見ました。</p> <p>「うん」</p>	<p>「そうそう、なあ加助」と、兵十がいました。</p> <p>「おれあ、このごろ、とてもふしぎなことがあるんだ」</p> <p>「おつ母が死んでからは、だれだか知らんが、おれに栗やまつたけなんかを、まいにちまいにちくれるんだよ」</p> <p>「それがわからんのだよ。おれの知らんうちに、おいていくんだ」</p> <p>「ほんとだとも。うそと思うなら、あした見にいよ。その栗を見せてやるよ」</p> <p>兵十への親しみを深めたごんは、ゆったりとした気分になって、月のよい晩、遊びに出かける。</p> <p>そこで、たまたま兵十に出会い、兵十に寄り添うようにつけていくのだが、兵十が自分の好意に気づいていないことを知ってがっかりする。</p>
<p>ごんと兵十は、やっとわかりあえた。だが、そのことにはかないこと、残念さ。</p>	<p>裏口から家へはいるごんを見た兵十は、いたずらぎつねめとばかり鉄砲をとり、どんとうつてしまふ。そして、土間に固めてあるくりを見て、すべてを知る。</p> <p>死ぬ直前だが、やっとわかってもらえて安心するごんと、自分のしたことの大きさに立ちすくんでしまふ兵十。</p>	<p>でも、いつかはきつと気持ちを通じあえると願うごん。</p>	<p>兵十への親しみを深めたごんは、ゆったりとした気分になって、月のよい晩、遊びに出かける。</p> <p>そこで、たまたま兵十に出会い、兵十に寄り添うようにつけていくのだが、兵十が自分の好意に気づいていないことを知ってがっかりする。</p>

主題

心の豊かなごんは、ひとりぼっちの寂しさからいたずらをしないではいられなかった。そのごんが、ひとりぼっちの兵十に「おれと同じひとりぼっち」と、ひたむきなやさしさをもった。だが、そのやさしさは、ごんが兵十に撃ち殺されて、初めて通じることになる。人の心のやさしと、そのやさしさが通じない人々の思いこみのおそろしさ、かなしさ。

理想

人のやさしさ、愛情を素直にわかりあいたい。こんな悲しいこと、おそろしいことはなくなつてほしい。

#### 分析表と分析のしごとについて

分析はくり返し一次、二次の「読み」のあとに置かれる、作品の「理解」の段階だ。読みが主として感性的な認識であるのに対して、理解は、主として知的な認識をうけもつ。その統一が、文学作品の読みを保障する。「叙事的な作品の構造の分析は、いちいちの場面（モメント）における人間関係だけではなく、いくつかの場面の原因⇨条件的な結びつきをも明らかにしなければならぬ（奥田・文学作品の構造について）から、分析表と分析の仕事は、次の手順でおこなった。

- 一、全文を登場人物と場面に区分して一覧表にする。この場合、全文を用いるのが原則的だろう。ここでも、その方法を用いたから、一言一句省略していない。はじめは、この方がいい。だが、大きな作品では、全文を用いると長くなりすぎ、一目で見るのがむずかしくなる。この場合もそうだ。読み手の心に、鮮やかな形象。場面がつけられていくから、省略することも可能だ。
- 二、やまばを中心にして、場面（事件のモメント）に区切っていく（たての線を入れる仕事）。やまばの次は、おこりがいい。「こういう事件がおこったきっかけの場面はどこか」という問いで、おこりの事件がとらえられ、その場面が区切られる。ここでは、「ちよつ、あんないたずらをしなけりやよかつた。」がおこりのできごとで、それを含む大きな場面が「おこり」だ
- 三、場面ごとに、描き出されているものを文章化し、記入させる。ここでは、はじまりとおこりは、構造が重層的にとらえられる。はじめ、この文章化は、むずかしいから、自由に意見を述べさせ、教師が短く文章化する、という手続きを経て、個人作業にすることができる。
- 四、三の総括が主題と理想になる。「主題というのは、作品の中にながされていく人間の生活現象の本質をさす用語」で、「理想は、主題で示されたものに対する思想的な態度で・・・、人間の生活現象に対する美的な感情⇨評価として作品のなかに具体的にあらわれている」ものだ。（奥田・前掲）前者を「えがかれているできごとの本質」といい、後者を「えがかれているねがい・きもち」と言いかえても、大きなまちがいはないと考えている。

このあとは、総合読みの段階において、この作品の指導は終わる。終わりの感想は、教師に多くのことを教えてくれるにちがいない。

\*ここで引用されている文献は、

「文学作品の構造 奥田靖雄著」（「国語教育の理論」むぎ書房所収）です

ダイジェスト版を紹介していますので、そちらをご覧ください。